

太宰府の文華と公文書館だより

134

近世紀行にみる太宰府

―雨夜の出来事―

ページID: 7241

梅雨の季節です。旅行中の雨は悩ましいものですが、雨が取り持つ縁もあるようです。

びんごのくにぬまくまぐんさんな

備後国沼隈郡山南（現在の広島県

がんしゅうしやほうざい

福山市）の狂歌師含笑舎抱臍（17

59～1807年）は、19世紀初頭

に太宰府を含む北部九州の各地を訪

れ、名所旧跡や旅の様子を『狂歌西

ときこう

都紀行』（1804年序）に著しま

した（『太宰府市史文芸資料編』に収録）。

『西都紀行』によると、4月14日に在所を出発した抱臍が太宰府を訪れたのは5月のことでした。天満宮に参拝するも、折からの雨。降りやまない雨に、急遽宰府に宿を取る人々がいて、その中に「今宵銅鳥居かねのとりいの前なる宿屋で日和申ひよりもうしの願に各々一芸をいだし神を慰む」と各宿屋に触れ回る男がいました。日和申は、晴天になるよう神に祈願すること。つまり神に芸を奉納し明日の晴天を願おうと触れ回っていたのですが、実際は宴会を開く口実ではなかったでしょう。夜、抱臍が会場の宿屋を

訪れてみると、諸国の旅人が入り交じり、伊勢いせびと人は松坂踊り、難波なにわびと人は花笠踊りのご当地踊り、手妻てづま（手品）、小唄、江戸歌舞伎の瀬川菊之丞せがわきくさく、上方歌舞伎の沢村国太郎さわむらくにたろうの物真似など、次々に一芸を披露しているところでした。抱臍も「何か一つ」と求められ、歌舞伎『仮名手本忠臣蔵かんなてほんちゆうしん』の一場面を茶化した狂歌を詠んで宴席を盛り上げました。

『西都紀行』の記事から、宿に集まった旅人たちには、踊りや唄、手品、物真似などを共有し、楽しむ文化的素養があったことがわかります。しかも古典芸だけでなく、江戸や上方の新しい流行が地方に持ち出され拡散されていく様子がうかがえるのです。今回の大河ドラマでも描かれるように、近世後期には江戸を中心に出版文化が興隆し、書物の流通が盛んになります。それとともにお伊勢参りをはじめとした庶民の旅行ブームがあり、旅先での交流が庶民文化の発展と伝播に大いに寄与したのではないかと、抱臍が遭遇した宰府の夜の出来事が教えてくれます。雨が取り持つのは人の縁だけではなかったようです。